

英国の天然ガス需給およびLNG導入の動向について

総合エネルギー動向分析室 研究員 船山 義之

はじめに

英国は、2003 年現在、一次エネルギーの純輸出国であり、北海で産出される石油およびガスが同国のエネルギー供給を支えてきた。しかしながら、近年、北海における石油およびガスの生産量が減少傾向にあることなどから、将来は純輸入国化することが見込まれており、これらの供給確保が、同国のエネルギー政策上重要な課題の一つとされている。

このような中、ガス輸入量の増大を見込んで、いくつかのガス供給プロジェクトが推進されており、その中でも、1990 年以来となる LNG の導入に注目が集まっている。

本報告では、まず英国のエネルギー事情、特に、ガス需給の現状と見通しについて整理し、輸入量増大の背景を明らかにし、次に、英国のガス産業の現状についてその仕組みを概観する。その上で、現在推進中の LNG プロジェクトを紹介し、最後に、LNG 導入による市場への影響について考察する。

1. エネルギー事情

1-1 エネルギー需給の概要

英国は、石油、ガス、石炭を産出しているが、近年は、国内資源の生産は減退傾向を示している。また、石油、ガスについては、純輸出国となっているが、石炭は既に全消費量の約半分を輸入に頼っており、さらには、ガスは 2006 年頃、石油は 2010 年頃には純輸入国になると予想されている。

1-1-1 一次エネルギー需給の現状

英国は、エネルギーの純輸出国であり、2003 年の純輸出量は石油換算で約 1,577 万トンであった。なお、2003 年の純輸出量は 2002 年の 3,165 万トンを大きく下回った。

表 1-1 一次エネルギー需給バランス(2003 年)

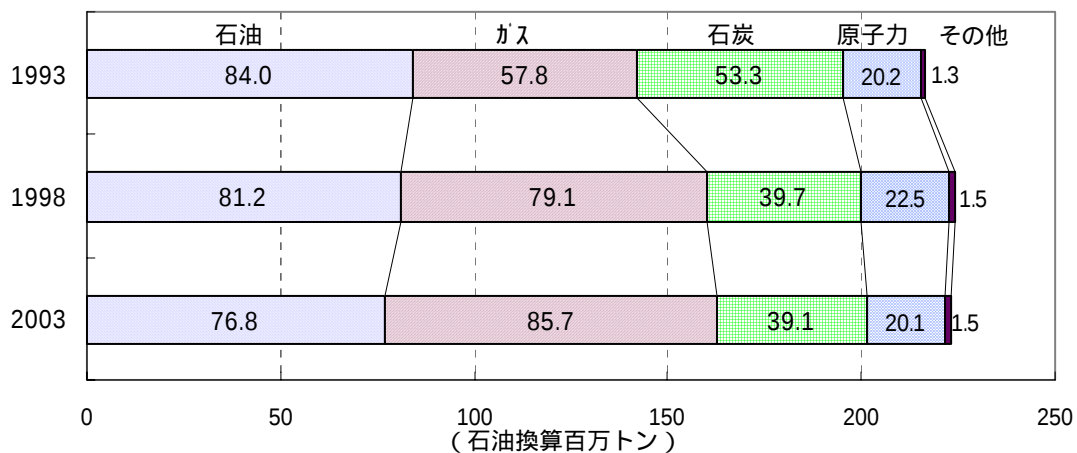
単位:石油換算千トン

	石油	ガス	石炭	原子力	その他	合計
国内生産	116,242	102,938	17,635	20,431	3,066	260,311
輸入	77,909	7,420	20,905	-	1,243	107,478
輸出	107,201	15,223	396	-	424	123,245
在庫変動他	-1,662	300	1,712	-	-92	259
一次供給	85,287	95,436	39,857	20,431	3,794	244,804

出所:Digest of United Kingdom Energy Statistics 2003(Department of Trade & Industry)

2003 年の一次エネルギー消費は 2002 年から +0.5%と微増し、石油換算 2 億 2,320 万トンであった。なお、エネルギー源別の構成比は、石油 34.4%、ガス 38.4%、石炭 17.5%、原子力 9.0%となっており、ガスが最大のシェアを占めている。

図 1-1 エネルギー源別消費動向 (1993～2003 年)



出所:BP statistical review of world energy 2004

1-1-2 天然ガス需給の現状および見通し

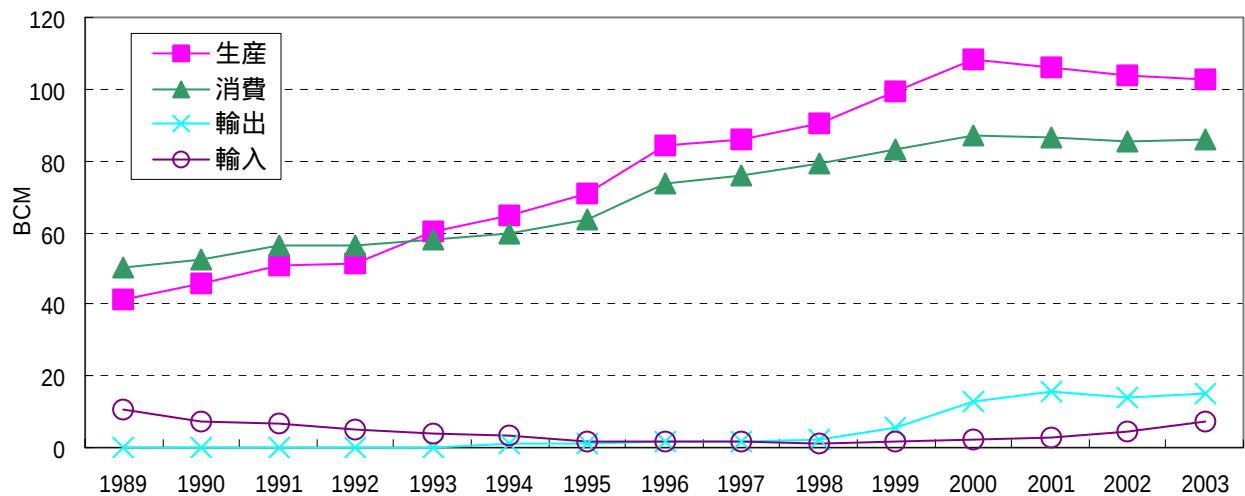
英国は、主に北海で生産する自国のガス生産量が消費量を上回っており、周辺国にガスを輸出している。2003 年実績では、オランダ、ドイツ、アイルランドなどへ 15.3BCM のガスを輸出しているが、一方で、輸入量は 7.5BCM であり、現時点ではガス純輸出国となっている (図 1-3)。

ガス需給の経緯を顧みると、1992 年以前は生産量が消費量を下回っており、1989 年時点では消費量の約 2 割相当を輸入で賄っていた。ガスの輸入ソースとしては、ノルウェーからのパイプラインによるガス輸入の他、アルジェリアからの LNG も輸入していた。

しかし、北海の開発が進み、ガス生産量が増加したため、1992 年にはガスの輸出を開始し、その後も、生産量の堅調な伸びに伴い輸出量が拡大し、1997 年にはガスの輸出が輸入を上回る「純輸出国」となっている。このような状況から、1991 年以降 LNG の輸入は行われていない。

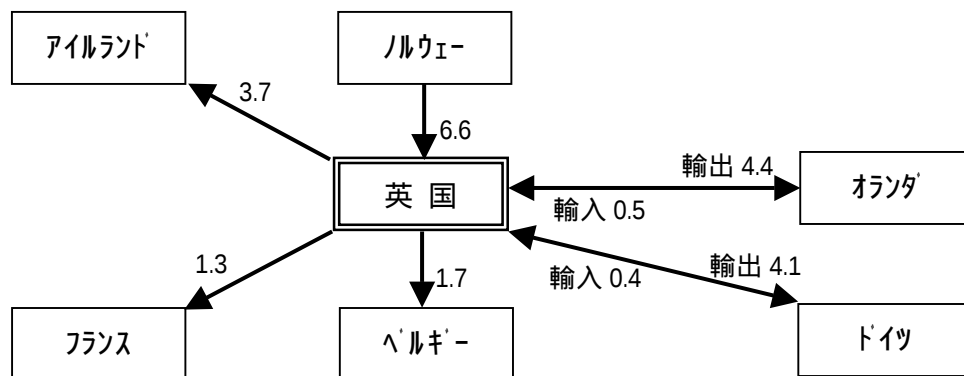
しかしながら、北海の生産量が減少してきているため、2001 年以降、ガス生産量は減少しており、これに伴い、近年ガス輸入量は増加傾向にある。

図 1-2 天然ガス需給バランス



出所:BP statistical review of world energy

図 1-3 天然ガス輸出入フロー (2003 年) 単位:BCM



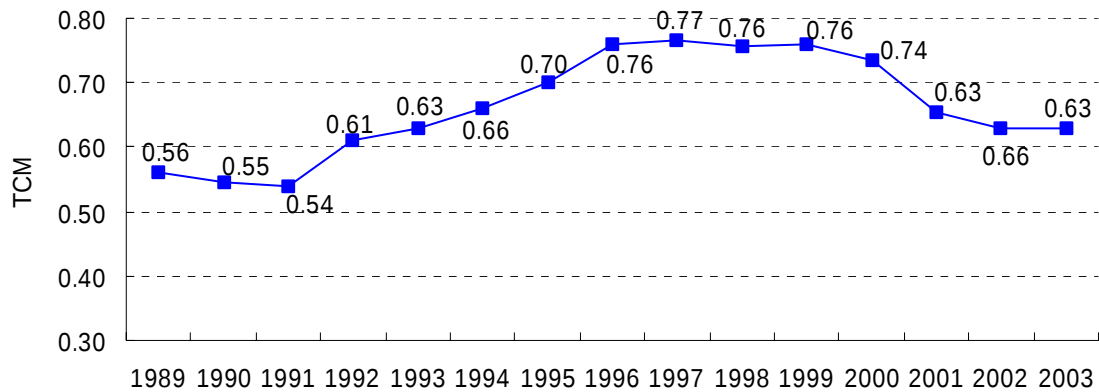
出所:BP statistical review of world energy 2004

このような中、英国では、開発企業に対する優遇措置なども検討されているが、埋蔵量が減少しているなど(図 1-4)、生産量の減少は避けられないと見られている。一方で、消費量については、ここ数年、景気低迷の影響から横ばい状態であるが、今後は、景気回復により、ある程度需要は伸びるものと見られていることから、近い将来、英国は再びガス純輸入国になるものと予測されている。

英国貿易産業省 (The Department of Trade and Industry ; 以下「DTI」) が 2003 年 2 月に発表した「ENERGY WHITE PAPER : Our energy future-creating a low carbon economy」(以下「エネルギー白書 2003」) によれば、英国がガスの純輸入国となるのは 2006 年頃であり、その後、需給ギャップが拡大し、2020 年時点では、需要の約 90%を輸入に依存するこ

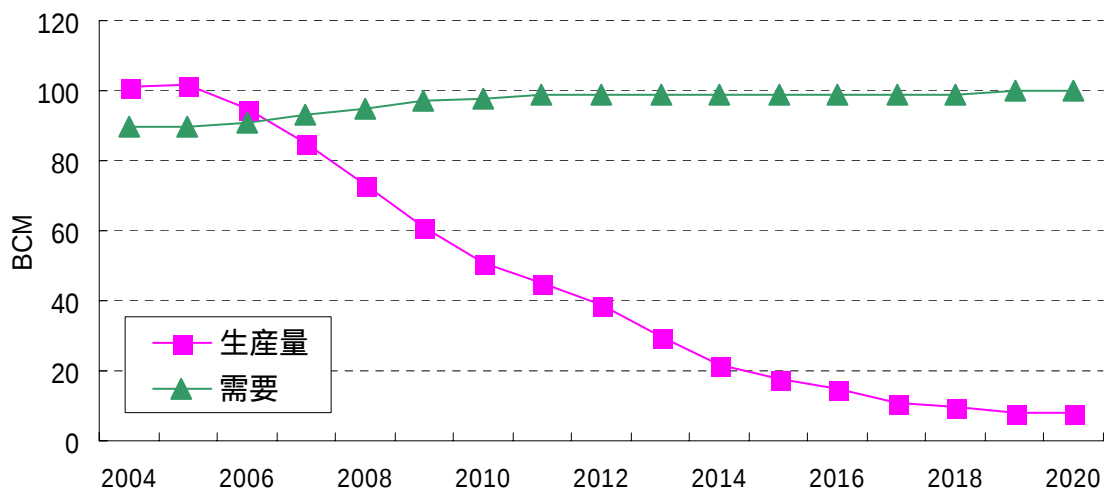
ととなる見通しが示されている。¹

図 1-4 天然ガス埋蔵量



出所: BP statistical review of world energy 2004

図 1-5 天然ガス需給見通し



(出所) DTI エネルギー白書 2003

1-2 エネルギー政策の概要

1-2-1 エネルギー白書 2003 の概要

英国 DTI は、2003 年 2 月、エネルギー白書 2003 を発表した。その背景には、環境問題へ

¹ エネルギー白書 2003 の詳細については、山中裕之「ENERGY WHITE PAPER Our energy future-creating a low carbon economy(英国貿易産業省)」(日本エネルギー経済研究所、ホームページ、2003 年 5 月)を参照。

の真剣な取り組みが必要となっていること、また、国内の石油、ガス、石炭の生産量が減少し、いずれエネルギー輸出国から純輸入国になるという問題にも取り組まなければならないことなどがある。

エネルギー白書は、DTI が毎年作成している、英国のエネルギー政策について取り纏めたものであるが、エネルギー白書 2003 については、前述の背景から、「エネルギーの未来 - 低炭素社会の設立」と題して、今後のエネルギー政策を長期的観点からどのように展開して行こうとするかの基本方針を示していることが大きな特徴であった。

以下にエネルギー白書 2003 で示されている英国エネルギー政策の課題および課題に取り組みにあたっての目標を示す。

(a) 新しいエネルギー政策の課題

2050 年頃までに、二酸化炭素の排出量を現状の 60% 以下に低減。

エネルギー純輸入国化の中での安定供給確保。

多様化が見込まれるエネルギー供給に対応するための設備投資。

(b) 新しいエネルギー政策の目標

二酸化炭素の排出量を、2050 年を目処に現状より約 60% 削減することを目指し、2020 年までに実効を挙げるよう努力する。

エネルギー供給の安定性を保つ。

永続的な経済成長と生産性向上に資するため、英国において競争力ある市場を形成する。

全ての家庭に適切かつ合理的な価格で必要なエネルギー（暖房）を供給する。

1-2-2 エネルギー白書 2003 における天然ガスの位置付け

エネルギー白書 2003 の中では、2020 年のエネルギーシステムの見通しが示されているが、コンバインドサイクルのような効率が高いボイラーの導入促進により、ガスは、低排出エネルギーとして、エネルギーミックスの中でシェアをさらに拡大するとされている。

一方、英国では国内産エネルギーの減少が課題とされており、DTI は、ガスについては 2006 年に、石油については 2010 年に純輸入国となると予測している。このようなことから、エネルギーの安定供給の確保という課題を解決するべく、エネルギーの多様化を推進することを掲げており、より多くのエネルギー源、供給者、供給ルートが必要としている。

したがって、ガスについては、現在の主要な輸入源であるノルウェーの他、ロシア、中東、北アフリカおよびラテンアメリカなどからの供給についても模索することとしており、このような供給源多様化へ追従するための投資、すなわち、パイプラインや LNG 供給設備の更なる充実の必要性が言及されている。

2. 英国のガス産業概要

2-1 ガス供給システム概要

2-1-1 国内ガス産業関連設備

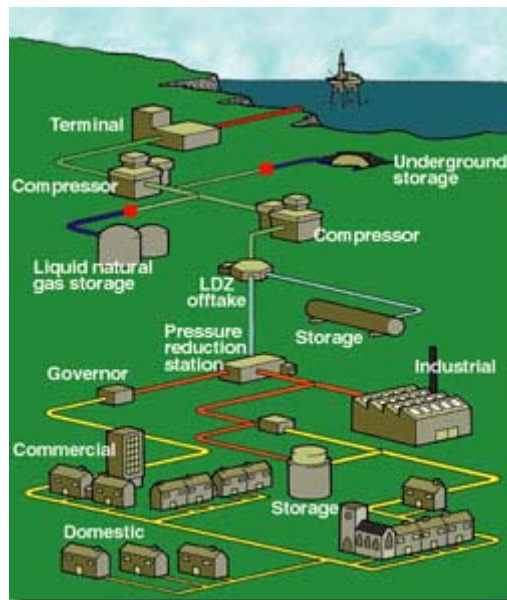
北海およびアイリッシュ海など英国島周辺で生産されたガスは、国内に 7 箇所ある beach terminals と呼ばれる受入設備に輸送され、品質のチェックおよび熱量の調整を行った後に、Transco が管理・運営する、総延長 27,500 km に渡る国内ガスパイプラインに投入される。

国内ガスパイプラインのうち、National Transmission System(NTS)は 6400 km 以上の高圧パイプラインから成り、ガスはこの NTS を通じて発電所や大規模な工業用需要家や 12 の Local Distribution Zone(LDZ)に圧送される。LDZ は、NTS の約半分の圧力で操業されるパイプライン網であり、local Distribution System へガスを輸送する役割を荷う local Transmission System(LTS)により構成される。

なお、現在英国には、9 つの大規模な貯蔵設備があり、NTS を通じてこれらの貯蔵設備へのガスの投入、払出が行われている。これらはガス需要の季節・日変動やその他特異な事情による変動に対応すべく運用されており、ガス価格が安い夏季に貯蔵設備にガスを投入し、価格が高い冬季には放出されるのが通常のオペレーションとなっている。

貯蔵設備には、ガス状態で地下の貯留層に注入する設備と液化して LNG として貯蔵する設備があり、ガスの貯蔵設備は Rough、Hatfield Moor、Hornsea、Hole House の 4 箇所、LNG 設備は、Glenmavis、Partington、Dynevor Arms、Avonmouth、Isle of Grain の 5 箇所ある。

図 2-1 ガス供給システム概念図



(出所)Transco ホームページ

2-1-2 プレイヤー

英国のガス産業に参画するプレイヤーは、producers(生産者)、shippers(シッパー)、gas transporters(輸送事業者)および suppliers(供給事業者)に大別される。

producers(生産者)

生産事業者は、ガスを探鉱・開発し、ガス田の操業を行い、生産されたガスを海底パイプラインを通じて beach terminals へ輸送する。さらに、beach terminals において、品質のチェックおよび熱量の調整を行った後に NTS にガスを投入する。

shippers(シッパー)

シッパーは、生産者および他のシッパーからガスを購入し、輸送事業者に輸送を委託し、そのガスを供給事業者や他のシッパーへ販売する。実情としては、シッパーは生産者や供給事業者が兼業しているケースが多い。

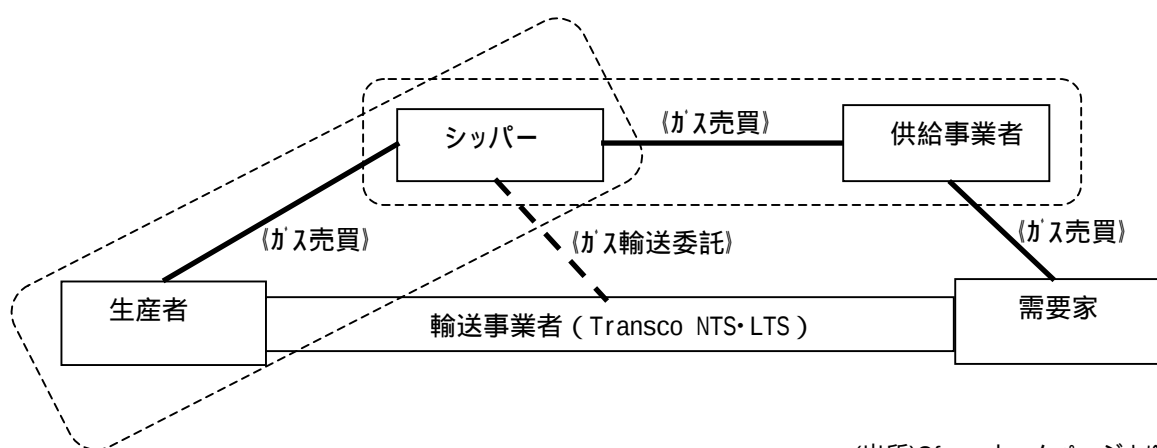
gas transporters(輸送事業者)

輸送事業者は、シッパーからの委託を受けガスの輸送を行う。なお、輸送事業は、NTS および LTS の大部分を所有する Transco がほぼ独占している。

suppliers(供給事業者)

供給事業者として Ofgem(The Office of Gas and Electricity Markets: 英国電力・ガス規制局)からライセンスを発行されている事業者だけが、小規模な需要家向けにガスを販売することができる。供給事業者は、輸送ネットワークを通じて顧客にガスを持ち届けるべくシッパーと契約する。

図 2-2 ガス産業プレイヤー相関図



(出所)Ofgem ホームページより

2-2 輸入ガスパイプライン

英国では、北海で生産されたガスをノルウェーから輸入している他、ベルギーの Zeebrugge

と英国の Bacton を結ぶパイプライン Interconnector を通じて、大陸のガスも輸入している。

Interconnector は、大陸向け、英国向け双方に送ガスできるシステムとなっているが、当初、英国のガスを大陸側へ輸出するのが主流であったことから、送ガス能力については、大陸向けが 20BCM/年、英国向けが 8.5BCM/年となっている。

しかしながら、今後予想されるガス輸入増加へ対応するため、同パイプラインについては、英国向けの送ガス能力増強が計画されており、当面、2005 年 12 月および 2006 年 12 月の 2 回の拡張により送ガス能力を 23.5BCM/年まで増強することが決定している。さらに、最終的に 25BCM/年まで増強することが現在検討されている。

この他、ノルウェーの Ormen Lenge ガス田で生産されたガスを輸送する Langeled パイプラインやオランダの Balgzand からの BBL パイプラインの建設も決定している。

表 2-1 英国の輸入ガスパイプライン

プロジェクト名 (オペレーター)	区間	延長/口径	送ガス能力 [BCM/年]	開始時期
Interconnector (英 Interconnector)	ヘルキ - Zeebrugge ~ Bacton	235 km/40inch	8.5	1998 年 10 月
Interconnector 拡張 1			8.0	2005 年 12 月
Interconnector 拡張 2			7.0 (計 23.5)	2006 年 12 月
Langeled パイプライン (ノルウェー Gassco)	ノルウェー Nyhamna ~ Sleipner Riser(Hub) ~ Eaington	1200 km/ 北区間 42inch、 南区間 44inch	20.0	2006 年 10 月
BBL パイプライン (蘭 Gasunie)	オランダ Balgzand ~ Bacton	235 km/36inch	13.0	2006 年末

(出所) Interconnector、Gassco、Gasunie ホームページより

2-3 ガス市場自由化動向

英国のガス市場では、1980 年代に当時のサッチャー政権下、British Gas(BG)の独占解体と競争原理の導入を目的として、以下のとおり自由化が進められた。このような中、Ofgem が市場の規制機関として、競争環境の維持・促進を図っている。

- ・1982 年 託送制度の導入 (年間使用量 200 万 Therm 超の需要家に対する参入規制緩和)
- ・1986 年 BG 民営化、規制機関 (Ofgas : Office of Gas Supply) を創設
- ・1988 年 MMC (独占合併委員会) 勧告 : 料金表公開、託送情報開示等
- ・1992 年 年間使用量 2,500Therm 超の需要家に対する参入規制緩和
- ・1995 年 ガス法改正 : サプライヤー、公共ガス輸送事業者 (PGT : Public Gas

Transporter)、シッパーのライセンスを規定

- ・ 1996 年 家庭用部門における参入規制の緩和開始
- ・ 1998 年 ガス市場完全自由化
- ・ 1999 年 Ofgas が電気市場の規制機関(Office of Electricity)と合併し、Ofgem 設立

自由化の結果、英国のガス市場では販売価格が低下するなど、一定の成功が見られ、今後もこの基本方針が継続されるものと見られている。

なお、1986 年に民営化された BG は、1997 年にはガス供給部門を分離し、新たに別会社として Centrica を設立した。さらに、2000 年には輸送部門と生産・貯蔵部門を別会社化し、現在では、海外事業 (BG International) と貯蔵部門 (BG Storage) を有する BG グループ、輸送部門 (Transco) をもつ Lattice グループ、販売部門を持つ Centrica の大きく 3 グループに再編されている。

3. LNG 導入の動向

英国は、1964 年、アルジェリアからの LNG 輸入を開始し、世界初の LNG 輸入国となったが、自国のガス生産量増加により、1991 年以降は、LNG 輸入は行われていなかった。

しかしながら、輸入量増加への対応、また、国がエネルギー政策上課題としているエネルギー源および供給ルート多様化の実現のため、いくつかの LNG 受入基地プロジェクトが推進されている。その中でも以下の 3 つのプロジェクトが、現在、手続きが進展し、比較的实现性が高いプロジェクトである。

3-1 英国の LNG 受入基地プロジェクトの概要

3-1-1 GRAIN LNG プロジェクト

(1) 概要

GRAIN LNG プロジェクトは、ロンドンから 20 マイル東方、メドウェイ川付近に位置するグレイン島にある、National Grid Transco (以下「NGT」) が所有する既存 LNG 貯蔵設備を LNG 受入基地に改造するものである。

同基地は、大消費地であるロンドンに比較的近く、また、ガス火力であるグレイン発電所が近接しているという利点がある。

(2) 設備

既存の施設を LNG 受入基地へコンバートするため荷揚設備などは新設するが、貯蔵タンクについては、当面、既存の 5 万 m³ の LNG タンク 4 基を使用することとしている。このフェイズ 1 により、2005 年第 1 四半期には、年間 330 万トンの LNG の受入が可能となる予定である。

また、同プロジェクトでは、既に拡張工事の計画認可(PLANNING PERMISSION)を受けており、早ければ 2007～2008 年の冬に、19 万 m³のタンクを 3 基新設するなどして、年間 720 万トンの能力増強を行うこととしている。この拡張工事は、英国ガス市場の需要動向次第で実施のタイミングを判断することとしているが、拡張が完了した時点では、同基地は 1050 万トン規模の受入基地となる。

(3)利用者

GRAIN LNG 基地は、サード・パーティー・アクセス（以下「TPA」）が適用される受入基地であるが、2003 年 10 月、同基地の所有者である NGT は、BP およびアルジェリア国営石油会社 Sonatrach との間で、初期能力である 330 万トンの 20 年間の利用契約を締結した。

BP および Sonatrach はアルジェリアにおける LNG プロジェクトのパートナーであるため、当該プロジェクトから LNG が供給されるものと思われる。また、BP はトリニダードバゴ、アブダビ、オーストラリアおよびインドネシアの LNG プロジェクトに参画していることから、それらのプロジェクトから LNG が供給されることも考えられる。

なお、NGT は、追加能力分についても 2005 年第 1 四半期末までに完売することを目指している。

(4)プロジェクトの経緯とスケジュール

- ・ 2003 年 4 月：フェイズ 1 計画認可
- ・ 2003 年 10 月：NGT - BP・Sonatrach 間で初期受入能力利用契約締結
- ・ 2004 年 9 月：フェイズ 2 計画認可
- ・ 2005 年第 1 四半期：フェイズ 1 建設完了予定（受入能力 330 万トン）
2005 年 4 月第 1 船受入予定
- ・ 2007～2008 年冬(需要次第)：フェイズ 2 建設完了予定
(+720 万トン 合計 1050 万トン)

3-1-2 DRAGON LNG プロジェクト

(1)概要

ウェールズ地方 Milford Haven の Warterston に建設予定の DRAGON LNG プロジェクトは、BG（権益比率約 50%）、Petroplus(同約 20%)およびマレーシア国営石油会社 Petronas(同約 30%)の共同開発プロジェクトであり、これらが新設した DRAGON LNG Ltd.(以下「DRAGON LNG」)がオペレーションを行うこととしている。

同基地は、現在 Petroplus の子会社が、石油、エネルギー関係の貯蔵およびその他サービスを行っているサイトに建設予定である。

(2)設備

LNG 受入基地建設に際しては、棧橋などの既存設備の一部は活用するが、荷揚設備、貯蔵タンク(16 万 $\text{m}^3 \times 2$ 基)および再気化器といった設備は新設する。

これらにより、2007 年第 4 四半期には、年間 60 億 m^3 (LNG 換算約 420 万トン) の LNG の受入が可能となる予定であり、さらに、同プロジェクトでは、2012 年までに年間 120 億 m^3 (LNG 換算約 850 万トン) まで拡張を行う計画としている。

(3)利用者

初期受入能力については、BG と Petronas がそれぞれ 50%を利用することで合意済みであり、拡張後の受入能力についても、両社が追加で購入する権利を有していることとしているが、割合については明らかにされていない。

なお、当該受入基地については、欧州委員会(以下「EC」)より、TPA 義務付けの適用免除に関する承認を取得しており、プロジェクト当事者の LNG のみを受け入れることとなる。

LNG ソースについて、Petronas は英 Centrica との間で 15 年間に渡る LNG 販売契約を締結しており、年平均 30 億 m^3 (LNG 換算約 210 万トン) を同基地に供給することとしている。第 1 船の受入は、早ければ 2007 年 10 月となる予定である。

ペトロナスは、自国マレーシアの他、イラン(Pars LNG)およびエジプト(ダミエッタ LNG)の LNG プロジェクトに参画しているが、DRAGON LNG 向けとして、どのプロジェクトから供給するかについては今のところ明らかにしていない。しかしながら、英国から最も近距離であるエジプトを主な供給ソースとすると見る向きもある。

(4)プロジェクトの経緯とスケジュール

- ・ 2003 年 2 月：フェイズ 1 計画認可
- ・ 2003 年 9 月：フェイズ 2 計画認可
- ・ 2003 年 11 月：Petroplus - BG 間の HOA 締結
《BG が初期受入能力の 50%を利用、拡張分の利用オプション(数量は不明)付与、BG が DRAGON LNG の株式 50%を買収》
- ・ 2004 年 3 月：Petroplus - Petronas 間の HOA 締結
《Petronas が初期受入能力の 50%を利用、拡張分の利用オプション(数量は不明)付与、Petronas が DRAGON LNG の株式 30%を買収》
- ・ 2004 年 8 月：Asean LNG Trading(Petronas 子会社) - Centrica 間で LNG 販売契約締結《15 年間、合計 450 億 m^3 (LNG 換算 3200 万トン) 以上》
- ・ 2004 年 9 月：TPA 義務付け適用免除承認
- ・ 2007 年 4Q：フェイズ 1 建設完了予定 (受入能力 LNG 換算約 420 万トン)
2007 年 10 月第 1 船受入予定
- ・ 2010 年 ：フェイズ 2 建設完了予定 (+ 約 210 万トン 合計約 630 万トン)

- ・ 2012 年 ： フェイズ 3 建設完了予定 (+ 約 210 万トン 合計約 850 万トン)

3-1-3 SOUTH HOOK LNG プロジェクト

(1)概要

SOUTH HOOK LNG は、DRAGON LNG と同じ Milford Haven にある Esso の石油精製所跡地に建設を予定しており、Qatar Petroleum(出資比率 70%)と ExxonMobil(同 30%)の共同開発プロジェクトである。

なお、同 LNG 受入基地は、カタールにおけるガス液化プロジェクト (Qatargas) とのタイアップのプロジェクトであり、LNG は同プロジェクトから供給される予定である。

(2)設備

LNG 受入基地建設に際しては、棧橋などの既存設備の一部は活用するが、荷揚設備、貯蔵タンク (16 万 m^3 × 2 基)および再気化基といった設備は新設する。

同プロジェクトは、第 1 フェイズとして、2008 年第 1 四半期に受入能力年間 780 万トンの規模で立ち上げ、第 2 フェイズとして、2010 年第 1 四半期までに、さらに年間 780 万トンの受入設備を増設する計画としている。第 2 フェイズが完了した時点では、同基地は 1560 万トン規模の受入基地となる。

(3)利用者

当該受入基地については、DRAGON LNG と同様、EC より、TPA 義務付けの適用免除に関する承認を取得しており、LNG はタイアップの液化プロジェクトである Qatargas から供給されることとなる。

(4)プロジェクトの経緯とスケジュール

- ・ 2003 年 10 月：フェイズ 1 ・フェイズ 2 計画認可
- ・ 2004 年 9 月：TPA 義務付け適用免除承認
- ・ 2008 年 1Q：フェイズ 1 建設完了予定 (受入能力 LNG 換算約 780 万トン)
- ・ 2009 ~ 2010 年：フェイズ 2 建設完了予定 (+ 約 780 万トン 合計約 1560 万トン)

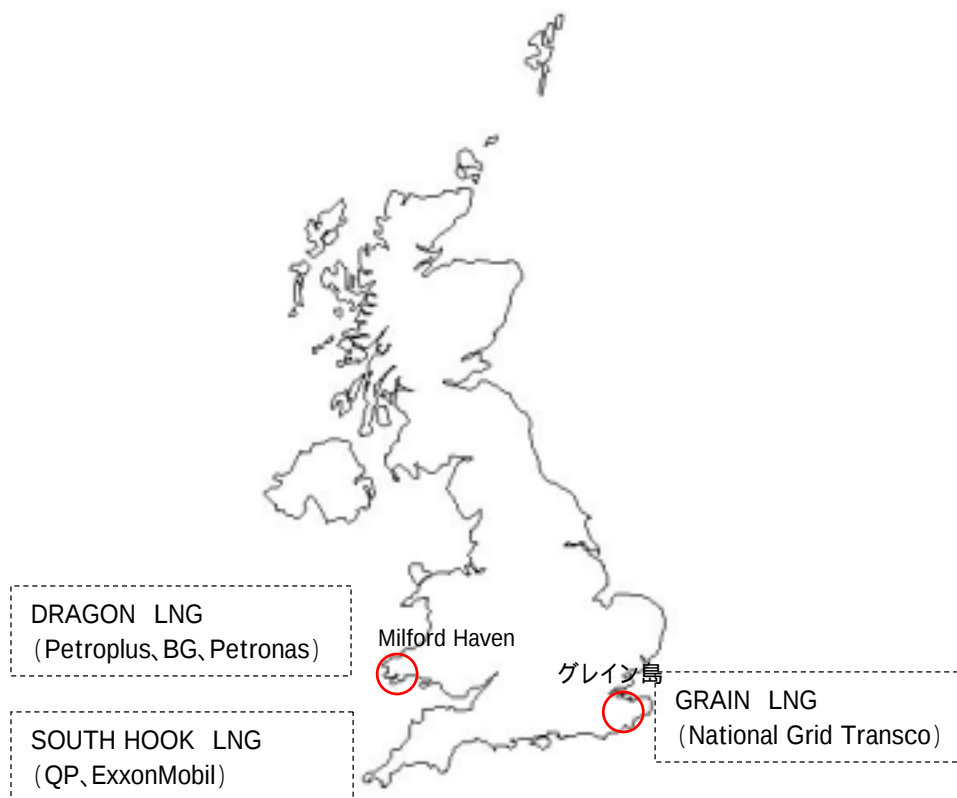
表 3-1 英国で推進中の LNG プロジェクト一覧表

	GRAIN LNG	DRAGON LNG	SOUTH HOOK LNG
場所	グレイン島	Milford Haven	Milford Haven
所有者	National Grid Transco	Petroplus(20%) BG (50%) Petronas(30%)	QP(70%) ExxonMobil(30%)

受入能力	フェイス 1:330 万 t(05) フェイス 2:720 万 t(07～08) 合計 :1050 万 t	フェイス 1:420 万 t(07) フェイス 2:210 万 t(10) フェイス 3:210 万 t(12) 合計 :850 万 t	フェイス 1:780 万 t(08) フェイス 2:780 万 t(09～10) 合計 :1560 万 t
利用者	BP、Sonatrach: 各々初期能力の 50% 拡張分は未定	BG、Petronas: 各々初期能力の 50% 拡張分も両社が利用するオプションあり (TPA 適用免除)	QP、ExxonMobil (TPA 適用免除)
LNG ソース	アルジェリア、その他トリニダード・トバゴなど BP が参画する LNG プロジェクト	エジプト、マレーシア他	Qatargas プロジェクト

(出所)GRAIN LNG、DRAGON LNG、SOUTH HOOK LNG 各ホームページより

図 3-1 英国で推進中の LNG プロジェクト位置図

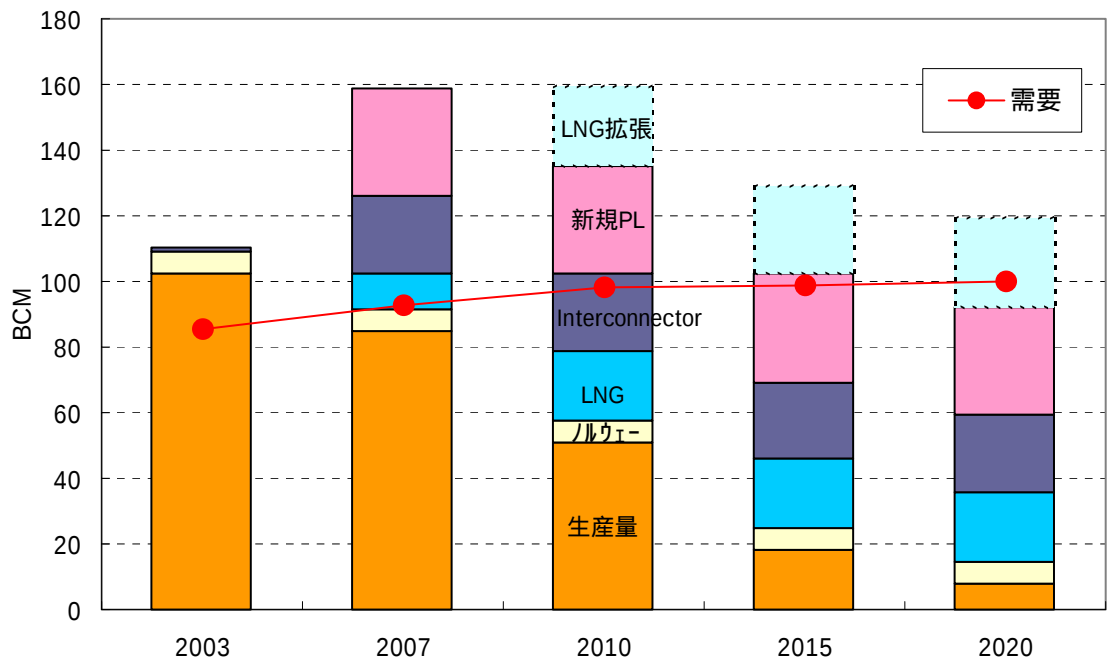


3-2 英国の LNG 導入による市場への影響について

前述のとおり、英国のガス生産量の減少に伴う輸入量増加を見越し、新規輸入ガスパイプライン建設に加え、LNG の導入が計画されており、許認可手続きといったプロセスが着実に推進されている。

現在、推進中のプロジェクトが計画どおり実現した場合の供給可能量とエネルギー白書 2003 における国内生産と需要を前提にした需給バランスを図 3-2 に示す。

図 3-2 英国の需要見通しと供給可能量



既存のノルウェーからの輸入量は 2003 年実績横ばいと仮定

なお、今回参照したエネルギー白書 2003 に基づく需要は、2010 年以降、需要はほぼ横ばいとされているが、実際には上記の数字よりも需要が伸びると見る向きが多く、LNG プロジェクト推進者も堅調な伸びを想定している。

しかし、この点を考慮しても、2020 年まで需要に見合う十分な供給プロジェクトが存在していることがわかる。すなわち、2010 年までは供給可能量の方が需要を上回っており、2015 年以降についても、現時点で決定しているプロジェクトにより、ある程度需給のバランスが取れると想定される。また、仮に、予想以上に需要量が増加したとしても、未決定ながら現在検討中のプロジェクト²が順次立ち上げられることにより、供給量が需要の伸びにある程度追従していくと思われる。

当面は、供給可能量が需要を上回るような絵になっているが、実態としては、プロジェクト推進者としても、ガス需給バランス動向を睨みつつ、実需要に応じてプロジェクトの立ち上げ時期を計画から前後したり、英国向けのガスや LNG の供給量の調整が行われたりするものと思われる。

² Interconnector が拡張 3 (+1.5BCM/年)を検討している他、Gazprom は、ロシアのガスをバルト海経由でドイツや英国などに輸送する North European Gas Pipeline(NEGP)の建設を計画している。

また、この間は、全体としては純輸入ポジションでありつつも、周辺国への輸出もある程度維持される可能性もある。

以上のことから、LNGの導入により、英国のガス需給バランスの中でLNGが次第に大きな位置を占め、供給数量の確保やガスの供給ソースの多様化を通して、英国のガス市場全体の需給安定化に貢献していくものと考えられる。

なお、英国のLNG受入基地の受入能力については、拡張分も合わせると約 3460 万トンとなり、英国は将来、有数のLNG輸入大国となる可能性がある。この受入能力は、2003 年の世界のLNG取引量の約 3 割に相当し、決して少なくない量であるが、Qatargas プロジェクトが SOUTH HOOK LNG とタイアップで立ち上げられるなど、液化プロジェクトが需要の伸びに追従すると想定されることから、英国のLNG導入によって世界全体のLNG需給がタイト化するような可能性は低いと思われる。

おわりに

英国では、ガス生産量の減少に伴って輸入量が増大していくことが予想され、供給側がそれに対応できるかどうか懸念されているが、輸入パイプラインの増強、新設およびLNGの導入により、概ね需給バランスは確保されるものと予測される。

しかしながら、需要が予想以上に急増し、需給バランスがタイト化する可能性も否定できないことから、今後の世界のガス市場の動向を占う上でも、英国は注目すべき市場の一つであるといえる。

また、近年拡大傾向にある大西洋のLNG市場に、英国というLNG需要の潜在成長性の高いプレイヤーが参入することにより、大西洋市場のみならず、世界全体のLNG市場に影響を及ぼす可能性がある。スポット市場の拡大などを通じて、世界のLNG市場の「グローバル化」・連動性が高まる中、日本、中国、韓国、台湾などの北東アジア市場にも一定の影響を及ぼす可能性があることから、今後も動向を注視していく必要があろう。

以上

お問い合わせ：report@tky.iej.or.jp